
怪盗黒揚羽

えんどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗黒揚羽

【Nコード】

N3236X

【作者名】

えんどう

【あらすじ】

時は昭和30年。世間は「黒揚羽」 金持ちばかりを狙い、犯行前に予告状を送りつけ、人を傷つけないという怪盗の噂で持ちきりだった。実の両親の素性を知らず、養父母に育てられた少年、伊織の部屋に、ある夜強盗が侵入する。実母の形見の手鏡を奪われそうになったところへ現れたのは、伊織の憧れの的である黒揚羽。黒揚羽が言うには、その手鏡には、伊豆の名家の秘宝のありかが隠されているらしいのだが……。ジューブナイルっぽい、レトロな王道探偵小説。ルパンや少年探偵団に胸躍らせていた方、もしくは今も躍

らせている方におすすめです。あとは……クールっ娘がお好きな方にも？（とある文芸賞に応募して落選した作品ですが、埋もれさせるのももったいないと思い、こういった形で発表することにしました）

プロローグ（前書き）

あらずじでも触れましたが、昨年某エンタメ系文芸賞に応募し、落選した作品です^^;

原稿用紙換算500枚超。ちよつと長めの単行本程度の分量はあります。

5日〜7日程度の頻度で更新していく予定です。すでに完成しているので、更新が滞ることはないと思います。

感想、批評等大歓迎です！

プロローグ

広い居間には、二脚の革張りのソファが向かい合わせに置かれている。間にはうつすら緑色がかったガラス天板のテーブル、床には幾何学模様を描いた深紅の絨毯、天井には、釣鐘型つりがねの花をかたどったランプが五つばかりついたシャンデリア。壁際では、線の細いローマ数字の文字盤を掲げた大きな柱時計が、チクタクと時を刻んでいる。傍らにはサイドボードがどっしりと構えており、草花だの果物だのを描いた、華やかな平皿やティーセットが飾られていた。

だが、そんな贅を尽くした部屋で繰り広げられているのは、一家の温かい団欒の光景でも、主人の優雅な休息のひとつでもなかった。

老境に差しかかった、目も顔も体つきも細長い男が、気難しい顔でソファに腰かけている。両腕両足を開き、威厳をかもし出そうと精一杯努力しているようだが、内心の不安を表すように、その指先はせわしくも手を叩いていた。

隣には、同じ年頃の大柄な婦人が寄り添っている。いや、寄り添っているというほど仲むつまじくは見えないだろうか。若作りでおしろいを塗りたくり、紫の地にクリーム色の百合の花という、派手なワンピースを着ていた。こちらは気難しいというより不機嫌な顔で、胸にビロード張りの宝石箱を抱きしめている。

二人の前には警官が二人、直立不動で立っていた。ぼつぼつと白髪はげの交じった髪をなでつけた、四十代半ばくらいのバタ臭い顔立ちの男と、三十前後の血気にあふれた感じの青年だ。

年かさの警官は、四方に鋭く目を走らせてから、胸ポケットから片手で便箋を取り出し、開いた。

前略 初めまして。黒揚羽と申します。ことう名乗れば、野暮な自

己紹介は不要なことでしよう。

このたび、貴女がお持ちのダイヤモンド、「天使の涙」の存在を知り、大変心動かされました。

ぜひ一度拝ませていただきたく、来る六月一日、御宅をご訪問しお借りする所存です。返却の期限は、当方の勝手により無期限とさせていただきますが、あしからず。なお、「天使の涙」が評判に反し二束三文の駄物であった場合は、このかぎりではありません。

それでは、当日を楽しみにしております。

草々

五月二十五日

黒揚羽

高遠登志子様

平凡な白い便箋だが、特徴的なのは、余白に黒い揚羽蝶の紋章が入っていることだ。印刷されたものではなく、専用の印で捺したもののらしい。

「まったく、ふざけた真似をする」

いらだちと呆れの混じった声で言い、警官は便箋をつまんだ指に力をこめた。便箋にわずかにしわが寄る。

そう、ソファに腰かけている婦人こそが、この予告状を送られた張本人、高遠登志子である。隣の男はこの館の主で某省の大臣、高遠義彦、年かさの警官は警視庁の副總監の工藤、若い警官は警部補の丹羽^{にわ}という。

現在、六月一日午前三時。工藤と丹羽は、前日の九時ごろからここで待機していた。当のダイヤモンド、「天使の涙」は、登志子の抱えている宝石箱の中にある。三十カラットを超える、高品質の洋梨型の白色ダイヤモンドで、革命まではロシアの大貴族が所有していたという由緒ある宝石だった。登志子夫人はこれを首飾りに加工し、パーティのたびに胸元で輝かせていたのだ。決して服装の趣味がよいとは言えない登志子夫人は、しばし陰でほかの出席者たちの

失笑を買つこともあつたが、このダイヤモンドだけは、掛け値なしの賞賛と羨望の眼差しで迎えられていた。

「早く来ませんかね」

丹羽が焦れたように軽く体を揺らした。

「馬鹿。不謹慎なことを言うな」

工藤がいさめた。内心では、彼も案外同じことを思っているのかもしれないが、高遠夫妻の手前おくびにも出してはいない。

「ははは、これは頼もしい」

高遠が笑うが、笑い方には覇気がなく不自然な感じもする。

対して、登志子はきつと目を吊り上げて、

「頼もしいじゃありませんわ、あなた。こうやって、今まで何人の方々が被害に遭つたと思つてるの」

「おい、刑事さん方の前で、そんなことを言うものじゃない」

高遠は登志子と二人の警官、双方に気を遣うように、身をすくめながら言った。気の小さい高遠が大臣にまで上りつめたのは、夫人の内助ないじょの功（などと呼べるようになつたまじいものではなかったとしても）であるというもっぱらの噂であり、彼は完全に尻の下に敷かれているのであつた。

「いえ、奥様のおっしゃることは真実ですよ」

工藤は感情を害したふうでもなく、さらりと肯定した。

「これ以上、愚直な叩き上げの連中に任せてはおけません。だからこそ、普段は捜査などに携わらない私が、こうして足を運んだわけです」

まぎれもない「叩き上げの連中」の一人である丹羽が、隣でむつとしたように眉を上げる。

「はあ……」

高遠はかえって恐縮したように言った。

そのとき、

「大変です！ 黒揚羽の部下らしい男が、屋敷に乗り込んで大暴れしております」

ぼっこりと腹のふくらんだ、中年と言つには少し若い警官が飛び込んできた。

「何だつて！ そんな馬鹿な！ あんなに警備の人間を置いていたんだぞ」

工藤が目をむく。

「本当です。とにかく助勢をお願いします」

警官は必死で続ける。

「行ってまいります！」

すわ自分の出番が来たとはかりに、丹羽が工藤に声をかけ、飛び出した。丹羽は剣道、柔道ともに三段という猛者で、その才を買われて今回の警備に駆り出されたのだ。

「すみません。やつの不意を打ちたいので、あまり大声を出したり足音を立てたりなさないで……」

警官があわてて注意すると、

「わ、わかりました」

丹羽は素直に駆け足を早足に変える。

二人が部屋を出るやいなや、

「言わんこつちやないわ！ これだから警察なんて当てにならないのよ！ 天使の涙が盗まれたらどうしてくれるの！」

登志子が金切り声でまくし立てた。

「申し訳ございません。ですが、必ず向こうで食い止めさせますから……」

自信家の工藤も、額にうつすら脂汗を浮かべている。と、またもドアがかすかにきしみながら開いた。

「今度は何……」

睨みつけるように顔を向けた工藤が絶句する。先程の警官が、ぐったりした丹羽の上半身を、わきの下に腕を入れる形で支えて入ってきた。

工藤は一瞬呆然としていたが、

「あ、あ……」

高遠と登志子が金魚のように口をぱくぱくさせて、意味をなさない声を発しているのに気づいたらしく、双眸に光を取り戻す。しかも、高遠夫妻は気絶した丹羽を見てではなく、明らかにドアから九十度ずれた場所、二人にとっては真正面を向いて驚いている。二人の視線の先を追い、工藤はもう一度絶句することとなった。

柱時計の振り子室の扉が開き、その前に、黒いシャツとズボンに覆面の人物が立っていた。いや、よく見ると黒ではなく紺色だ。その昔、闇にまぎれて活動する忍者は、柿色や紺色の衣装を身にまとっていたというが、それと同じ理由からだろう。

「出たな！」

工藤は腰の拳銃に手をかけた。まるで化け物か怪物でも現れたような言い草だ。そのとたん、例の警官が豹のような俊敏さで飛びかかり、工藤の両腕をつかむ。

「このっ……！」

振り払おうともがく工藤だが、相手は涼しい顔でびくともしない。そこへ覆面の人物が、一まとめにした長い髪を揺らしながら駆け寄ってきた。

「悪いね」

瞳に不敵な微笑をたたえて言うなり、工藤の背後に回り込み、首に腕を回して頸動脈を押す。工藤の体から力が抜けた。床に崩れ落ちるところを、警官　いや、偽警官が支え、ゆっくり横たわらせてやる。

高遠夫妻は抱き合って震えていた。気の強い登志子でさえ、立ち向かおうなどとは思っても寄らないらしい。宝石箱も床に取り落とし、てしまい、「天使の涙」がその絢爛たる輝きをのぞかせている。

覆面の人物　怪盗と、偽警官が悠然と二人に近づいてきた。

「床に座ってくれないか」

怪盗が口を利いた。穏やかな物腰がかえって不気味で、高遠夫妻は蛇に睨まれた蛙さながら、ずり落ちるように床に尻を突く。

「手を後ろに回して……そうそう」

怪盗と偽警官は、夫妻の両手をソファの足につなぎ、両足も縛り上げてしまった。怪盗は、今度はハンカチを使って「天使の涙」を拾い上げる。てのひらにのせてちよっと眺めると、丁寧に包んで腰の革袋に入れた。

「あ、あんた……どうやって逃げるつもりよ」

ようやく、うわずった声ながら登志子が口を開いた。

「時計の中には、警察が来る前から隠れてたのかもしれないけど、今は庭中に警官がいるのよ」

恐怖と動揺のあまり、一時的におかしくなっているのか、登志子の目がぎらぎらした光を帯び始める。

「警官に変装してるそいつはともかく、あんたはただじゃすまないわ！」

だが、怪盗は動じるそぶりもなく、

「ご忠告ありがとう。だが、そんなことは先刻承知。つまり警官の格好をしていればいいわけだね」

偽警官に目くばせする。と、彼はいきなり制服のボタンを外し始めた。上着を脱ぐと、何と丸めた衣服が腹にくくりつけられているのがあらわになる。もちろんそれは警官の制服だ。

「どうも滑稽な姿で……」

紐をほつきながら、偽警官が照れたように笑う。

「すまないな。だが、背に腹は代えられなくてね。いや、この場合は腹は背に代えられないのか」

「言い得て妙ですね」

偽警官は、今度は照れ隠しではなく、心底愉快そうに口元をほころばせた。外した制服を怪盗に手渡す。怪盗はそれを、今の衣装の上から素早く身につけると、夫妻に背を向けてごそごそやり始めた。どうやら覆面をはぎ取り、変装を施しているらしい。最後に髪を団子状にまとめ、制帽の中に押し込んだ。

「では、少しの間我慢してくれ」

怪盗がわずかに振り向いて言うと、偽警官が夫妻の口に手ぬぐい

でさるぐつつわをはめる。二人は堂々と玄関に通じるドアから出ていった。

あとに残されたのは、うなり声を上げ鼻息も荒くもがく登志子と、対照的に、安心して虚空を見つめる高遠であった。

第一章 怪盗と強盗

昭和三十年、夏。

中野伊織いおりはあくびをしながら、危なっかしい足どりで階段を下りた。陽ひの当たらない一階の廊下では、ひんやりした湿気が肌にまとわりつき、足の裏もぺたぺたと床に貼りつくようだ。さわやかな朝とは言いがたいが、冷たい水で顔を洗うと、だいぶ気分がすっきりして頭も冴えてきた。

居間に入って、

「おはよう」

声をかけると、ごはんをほおばっていた父、繁しげは、「おう」とも「うん」ともつかぬ返事をして、母の由紀子は台所から顔を出して「おはよう」と答える。

「もう、なかなか起きないんだから。三回も声かけたのよ」
茶碗と味噌汁のおわんを伊織の前に出しながら、由紀子が言った。「昨日も遅くまで本読んでたんでしよう。夜更かしはやめなさいって、いつも言ってるのに」

「わかつてるんだけどさ……」

朝から小言は聞きたくない。伊織はちょっと口をとがらせた。昨夜はルブランの『奇巖城』を読み返していたら、結局床に入るのが一時近くなってしまったのだ。

納豆にしょうゆをかけてかき混ぜ、ごはんにのせて食べ始める。

だが、父が手にしている新聞に、つい視線が吸い寄せられ、箸の進みがしばし止まった。伊織のほうを向いているのは社会面。北朝鮮の残留者問題、スイスで開催される「世界母親大会」とやらの話題、先日の北海道の豪雨の被害、東京都庁の汚職。

「うん」

由紀子が見とがめて言った。

「よそ見しないで、さっさと食べちゃいなさい」

「はい……」

伊織は声に不満をにじませながらも、言われたとおりにペースを上げる。

「あなたもお行儀の悪いことしないで」

「ん、ああ」

繁も気まずそうに新聞を閉じ、畳に置いたが、

「もしかして、例の黒揚羽が気にかかるのか？」

話を逸らすつもりか、伊織に訊いた。いともたやすく心を見透かされたのと、自分の単純さを指摘されたような気がしたので、伊織は気恥ずかしくなり、

「ん……まあね」

言葉を濁した。

「黒揚羽ねえ。一体何者なのかしら」

問いというよりはつぶやきに近い調子で、由紀子が言う。伊織と繁はそろって首をかしげた。

「まるでちよっとしたスターよね。週刊誌にも出てるし、ご近所でも噂になってるわ」

「ああ。うちの会社でも、そりゃあお偉方はよく思っちゃいないだろうが、若いやつらの中にはファンもいるよ。今まで新聞なんて、スポーツ面とラジオ欄しか見なかったのに、黒揚羽のおかげで社会面にも目を通すようになったやつだとか、被害に遭った家をわざわざ見に行ったやつだとか」

「あら、どこも同じなのね」

「僕は人んちをのぞきに行くほど、野次馬じゃないよ」

伊織はささやかに抗議した。

「まあ、応援したくなる気持ちもわかるさ。少なくとも俺たち庶民にはな」

繁はちよっと小気味よさそうに笑った。

黒揚羽。それは、近頃世間を騒がせている怪盗の自称であり、通称であった。初めて噂を聞く者であったら、怪盗なんて、おとぎ

ばなしの妖精や魔法使いと同じような空想の産物、せいぜい少しかり風変わりな泥棒が祭り上げられているだけさ、とせせら笑うかもしれない。だが黒揚羽は、まさに怪盗の称号にふさわしい特徴をそなえていた。富裕層　特に、私利私欲のためなら手段を選ばないような者ばかりを狙うこと、犯行の前に予告状を送りつけること、人を殺したり傷つけたりはしないこと、などだ。なお、目撃者が一様に語る、「長い髪」「華奢な体つき」といった言葉と、名前の優美なイメージから、その正体は女性だとささやかれている。

黒揚羽が出没するようになってからというもの、身に覚えのある実業家や政治家たちは枕を高くしては眠れず、警察はじだんだ踏んで捜査に奔走した。ジャーナリズムはこぞつて、今日はどこどここの社長が、借金のかたに手に入れたセザンヌの絵が、今日は元何々財閥総帥秘蔵の、千利休ゆかりの茶碗が、今日は大臣なにかしの夫人自慢の、ダイヤモンドの首飾りが盗まれたなどと、黒揚羽の活躍を書き立てた。本屋ではアルサーヌ・ルパンや怪人二十面相の本を平積みにし、ここぞとばかりに売り出すありさまだ。

探偵小説マニアの伊織は、黒揚羽への思い入れも人一倍強かった。単に大衆がヒーローならぬヒロインを求めて賛美したり、あこぎな金持ちに対して溜飲りゅういんを下げたりする気持ちばかりではない。自分の夢が突然現実になったような、喜びと戸惑いの入りまじった気持ちも抱いていたのだ。

「お、もうこんな時間か。いかんいかん。伊織よりも俺が遅刻しそ
うだ」

繁はかけ時計に目をやって言い、味噌汁を飲み干して出ていった。伊織も急いで残りの朝食を平らげ、歯磨きと手洗いを済ませると、「行ってきます」

洗濯物を干し始めた由紀子に声をかけ、家を出た。むらのあるねずみ色の雲に覆われた空からは、大粒の雨が落ちてくる。憂鬱な天気だが、空梅雨と騒がれている今夏のこと、むしろ慈雨と思って感謝するべきなのかもしれない。ズボンの裾や鞆を濡らしながら、開

店前の静かな商店街を通り抜け、伊織は早足で駅へ向かった。

いつも仏頂面をしている、小柄な初老の教師が、分厚い封筒を抱えて入ってくると、教室の喧騒はいったん静まった。だが、浮き足立っている生徒たちのこと、さざなみのようなひそひそ声はいつまでも消えない。

「じゃあ、これから期末試験の答案を返すぞ」

声は大きいですが、どこか投げやりな口調で教師が言い、封筒から紙の束を取り出す。

「青木」

「はい」

机の上で手を組み、上履きの先でとんとんと神経質に床を叩いていた男子生徒が、さっと席を立つ。

「東^{あずま}」

「はい」

「安藤」

「はい」

順番が進むにつれて、教室は喜びや驚き、安堵や落胆の声に包まれ、空気も緊張したものから興奮したものへと変わっていった。

「中野」

自分の名を呼ばれ、伊織は立ち上がりつつ教壇に向かった。答案を渡された瞬間、たくさんの赤い斜線が目に入る。点数を確認してみると四十八点だ。化学は伊織のもっとも苦手な科目であり、特に今回の試験は自信がなかったので、覚悟はしていたが、それでもまったくショックを受けないわけではない。

ため息をついて席に戻ると、

「どうだった？」

後ろの席の立花明生^{あきお}が、愛嬌のあるどنگりまなこをくりくりさせて、身乗り出した。

「どうもこうもないさ。顔見てわからないか？」

伊織は大袈裟に眉をひそめてみせた。

「よおくわかったよ。何点？」

「……四十八点」

「そうか。まあ、次があるさ」

明生は芝居がかかったしぐさで、伊織の肩に手を置く。

「うん。でも、母さんにこっぴど油をしぼられそうだ」

両親に試験の答案を見せる習慣はないので、点数を訊かれてもごまかすことができるが、通信簿は見せないわけにはいかない。中間試験の点数も平均すれすれといったところだから、成績は推して知るべし。楽しい夏休みの前に待ちかまえる試験を思うと、今から少々憂鬱だ。

「立花こそどうだったの？」

伊織は答案を机の上に伏せ、教科書で重しをしながら訊いた。

「俺？ 俺は思ったよりよかったよ」

明生は余裕たつぷりに笑って胸を張った。こんな態度を取ってもまったくいやみではなく、むしろ微笑ましく感じられるのは、彼の人徳と素直さによるところだろう。

「へえ。もったいぶらないで、はっきり教えるよ」

伊織とは反対に化学の得意な明生がこう言うからには、高得点に違いない。

「うん。九十点ちょうど」

こめかみのあたりを指でかきながら答えた明生に、

「さすが、優秀じゃないか。何点か分けてくれよ」

うらやましく思いながらも、伊織は本心から贅辞を送った。

「あっ」

唐突に明生が、何かに気づいたらしく声を上げた。伊織がはっとして前を向くと、答案を同級生の宮島が手にして見ている。傍らでは、いつも宮島とつるんでいる井上ものぞき込んでいた。

「返せよ」

むっとした伊織が伸ばした手をかわし、

「四十八点、と」

宮島はぼそりと言った。伊織は頬に血が上るのを感じる。

「うわあ、ひでえ。俺だつてもつとましな点だったぜ」

井上が口を挟む。ただの追従ついでではなく、少なからず本音らしい響きがこもっているのがまた悔しい。

「一年の一学期からこれじゃ、先が思いやられるな」

「おまえ、来年進級できるの？」

気の置けない者同士の軽口ではなく、明らかに悪意の感じられるからかい。伊織がうつむいて黙り込んでいると、

「やつぱり、どこの馬の骨かも知れないやつは、頭もそれなりだな」

宮島の言葉が胸を刺した。思わず顔を上げると、相手が傷つくの期待しているというような、唇をゆがめた酷薄な顔をしている。

「何だつて！」

怒鳴り声とともに、机をバンと叩く音と、椅子がガタンと揺れる音が聞こえた。伊織が驚いて振り向くと、明生が血相を変えて立ち上がり、宮島と井上を睨みつけていた。宮島は気に障る薄ら笑いをやめなかったが、井上はひるんだ表情を見せている。ほかの同級生たちもみな、かたずを呑んでなりゆきを見守っていた。

「ふざけるな！ おまえら、言つていいことと悪いことの区別もつかないのか？ 中野に謝れよ！」

「立花」

伊織はあわてて明生の手首をつかみ、制止の意をこめて見上げた。

「こら、そこ！ 授業中だぞ」

同時に教師の叱責が飛ぶ。

「だけど先生……」

釈明しようとする明生を、

「言い訳はいい。早く座れ」

にべもなくはねつけると、

「ほら、宮島も井上も席に着け。解説を始めるぞ」

教師は教科書で自分のてのひらを二、三度叩いた。明生は唇を噛

み、すごぶる不本意そうに腰を下ろす。宮島は相変わらず冷然と、井上はほっとしたようにそそくさと、それぞれの席に戻った。

「まず問一と問二。これは中間試験の範囲内だし、説明するまでもないな。問一の答えは、単体がイ、ホ、ト、化合物が八と二、混合物が口とへ。問二は口、ホ、へで、元素記号は順にMg、Zn、Kだ。問三だが、窒素の化学式は……」

教師が解説に集中し始めたころ、

「ほんと、いやなやつだよな」

明生がいまいましたそうにつぶやくのが聞こえた。

「大病院の院長の息子だからって、人を見下しやがってさ」

「落ち着けよ。気持ちは嬉しいけど、あんなやつら、相手にするだけ時間のむだだし、むきになったら向こうの思うつぼだし」

「おまえってやつは、大物なんだか気概がないんだか……。これじや立場が逆じゃないか」

「気概がないとは言ってくれるなあ」

「だってさ、あそこまで言われて黙ってるなんて……。理性的だとか、寛容だとかってのは美德だと思うけど、さすがに見えていて齒がゆくなるよ」

ふくれつつらをする明生を前に、伊織はただ苦笑した。

伊織は自分の氏素性を知らない。伊織の母親　と思われる女性　は、まだ乳飲み子だった伊織を抱いて、空き地で行き倒れになっていたという。近くを通りかかった中野夫妻が医者を呼んだところ、赤ん坊は空腹と疲労で衰弱していただけだったが、女性は肺炎から敗血症を患っていた。そのまま病院に運ばれたものの、数日後には帰らぬ人となってしまうたのである。見舞いのつもりで病院を訪れ、そのことを知った繁と由紀子は、子宝に恵まれないのを悲しんでいたこともあり、これも何かの縁と、遺された子供を引き取ることにしたというわけだ。

子供が「伊織」という名前であることは、おくるみに縫いつけられていた文字からわかったが、それ以外のことは一切不明であった。

身分証の類は見当たらなかったし、警察も引き取り手の決まっている孤児の身元調査になど、ろくに対応してくれなかったのだ。女性の数少ない持ち物の中で、唯一手がかりになりそうだったのは、漆塗りに紅梅の蒔絵を施した、古めかしい手鏡だったが、これをどう使って母子の身元を調べればよいものか、一介の民間人に過ぎない繁たちにはわからなかった。

あまつさえ血縁にまつわる噂というのは、色恋沙汰の次に人々の興味を惹くものだ。ましてこうも劇的ないきさつがあつては、伊織が繁と由紀子の実子ではないということが、知れ渡らないほうが不思議であつた。伊織自身も、周囲の人々が自分に向ける、同情と好奇の入りまじった眼差しや、ひそひそと交わされる会話の断片や、宮島のような心ない輩からときに浴びせられる、あからさまな侮蔑の言葉によって、早くから真実を知っていた。

とはいえ、あの悲惨な戦争と、敗戦後の窮乏と混乱の中、生さぬ仲の自分をいつも慈しみ育ててくれた両親に、伊織はいくら感謝しても足りないと思つているし、義理や理屈ではない愛情を抱いてもいる。生みの親がどこの誰なのか、気にならないといえば嘘になるが、さりとて切実に知りたいと思うわけでもなかった。

「いけね」

教師がじろつと二人を睨んだので、明生はちよつと舌を出して首をすくめた。伊織もあわてて前を向き、鉛筆を持ち直す。脳裏に残る宮島の言葉を追い払うように、軽く首を振ると、伊織は板書されている化学反応式を書き写し始めた。

いわゆる草木も眠る丑三つ時。居酒屋でさえも看板を下ろし、町は静まり返つていた。時折、悲しげにも物恐ろしくも聞こえる野良犬の遠吠えだけが響き、月が雲を透かしておぼろに輝いている。

異様な気配に、伊織は眠りから覚めようとしていた。夢うつつに、

がたごとというかすかな物音が聞こえる。はっと目を開けると、四畳半の狭い部屋のこと、見回すまでもなく、物音の主が視界の隅に飛び込んでくる。伊織はがばっと跳ね起きた。心臓が早鐘のように鳴り始める。

物音の主は机回りを漁っていた。月光は弱々しいうえに逆光で、その姿は暗くかげつていたが、父でも母でもない、見知らぬ人間だということくらいはわかる。中肉中背、というにはやや上背のある男だった。

伊織の動きが目に入ったのだろう、男は手を止めてこちらを向いた。伊織の心臓がひときわ大きく跳ね上がる。後ろに手を突いた体勢のままあとずさった。口の中が干上がり、額やてのひらから脂汗がにじみ出る。

男は戸惑うことなく、腰から何かを抜いた。暗がりにも目が慣れてきた伊織には、その正体を見て取ることはできたものの、しばし脳が認識を拒む。

(……拳銃!?)

映画や小説、ことに伊織の愛する探偵小説ではおなじみだが、多くの人は、一生涯実物を目にすることはないのである。凶器だ。

男はやや大仰な動作で安全装置を外し、銃口を伊織に向けた。あまりに非現実的な状況に、今度こそ頭の回転が追いつかなくなり、伊織は何も考えられず、感じられなくなってしまった。

「大声を出すなよ。おもちゃじゃないんだからな」

男が低い声で凄みを利かせた。伊織は我に返り、がくがくと首を縦に振る。男は変哲のない作業着を着ていた。目が細いのと頬骨が張っているのが目立つくらいで、特別いかついというわけではないが、心なしか、全身から剣呑さが立ち上っているような気がする。

「おまえ、中野伊織だろう?」

どうして自分の名前を知っているのだろうか? そして、なぜ確認する必要があるのだろうか? 怪訝に思ったのと、認めたら何か危害を加えられるのではないか、という危惧から、伊織は今度はためら

いがちにうなずいた。拳銃などを持っているところからしても、この男はただの物盗りではないのかもしれない。

さらに、次に男が発した質問も、伊織の予想だにしないものだった。

「鏡はどこにある？」

「かが……み？」

伊織は上あごに貼りついた舌を引きはがして、かすれた声で訊き返した。

「そうだ。おまえの母親が持ってたっていう手鏡だ。まさか捨てたり、売ったりはしていないだろう？」

理由はわからないながら、男の意図は呑み込めた。が、生みの母の唯一の形見を、得体の知れぬ男の言うなりに差し出すのが悔しく、伊織はすぐには返事ができない。

「何度も言わせるな。鏡はどこだ？」

男が語気を強め、一步近づいてきた。

「お、押し入れに……」

とつさに口を割ってしまう。

「ふん。おまえが出せ」

男は抑揚のない声で命じた。伊織はふらふらと立ち上がり、銃口を気にしながら男に背を向けた。押し入れのふすまを開け、色あせた風呂敷に包まれた鏡を取り出す。

箱を抱きかかえ、男のほうに向き直ろうとしたときだった。

「待て」

抑えてはいるが凜とした、中性的な声が、息のつまるような緊張と静寂を破った。伊織はもちろん、男も弾かれたように振り返る。

そこには、窓の棧に両足をのせ、膝を折った体勢の人影があった。鼻から下を覆面で隠し、ぴったりしたシャツとズボンを身につけている。一つに結び上げた髪と、マントが風になびいていた。シャツもマントも同じような暗色なので、体の線は見えにくい。それでも控えめな胸のふくらみが見て取れ、少年ではなく女性だということ

がわかった。

「誰だ、貴様」

新たな闖入者ちんにゅうしやに銃口を向けて、男が訊いた。だが、伊織にとってはもはや明らかなことだ。

（この人は……あの……）

「信じられない」という思いと「そうに違いない」という思いが、伊織の心の中で交互にふくらむ。今度は恐怖ではなく、期待で胸が高鳴っていく。男とて、彼女の噂を耳にしていないはずはあるまいが、とつさには思いつかないのだろう。

「黒揚羽……？」

女性が答えるより先に、伊織は思わず口に出していた。女性は伊織のほうを向き、あごをしゃくって、

「私もずいぶん有名になったものだな。名乗る前に正体を言い当てられるなんて」

「黒揚羽だつて？ ああ、今女子供がピーピー騒いでる、きざな女泥棒か？」

黒揚羽から銃口を逸らさぬまま、男は鼻で嗤わらった。

「本物なのか？ 黒揚羽は金持ちしか狙わないし、盗みに入る前には予告状を出すって聞いたが」

「あいにく本物さ。ただ、今回は盗むつもりで来たんじゃないんだ。こみ入った事情があつてね。おまえだって、自分の仕事にどんな意味があるのか、不思議に思っていないはずはないだろう？」

「貴様……なぜそんなことを知っている？」

「私もはなはだ興味があるんだ、その鏡に。だからこそ、こんな夕イミングで現れたんだが」

その答えから、彼女を敵 少なくとも邪魔者だと認識したのだろう。男は黒揚羽に殴りかかった。拳銃を使わなかったのは、銃声が響くのをおそれたからか、女だと思つて見くびったからか。黒揚羽は棧から飛び下りると、男の懐に入つて、みぞおちにこぶしを打ち込んだ。

「ぐふっ」

男がぐぐもった呻き声を上げてくずおれる。その体の下敷きにならないよう、黒揚羽はさっと身をかわした。

だが敵もさる者、次の瞬間、男はカツと目を見開いて銃を抜く。とはいえ、幸運にもその動きはまだ鈍重で、手元もふらついていた。黒揚羽がとつさに横跳びに跳ぶ。

家中を揺るがすような強烈な音と衝撃が、伊織の脳天に響いた。音がやんでも鼓膜が震えているような気がする。銃弾は、黒揚羽のマントをかすって壁にめり込んだ。

「ちっ」

男が舌打ちをして、再び照準を合わせようとする。その隙に、黒揚羽は拳銃を蹴り上げた。こんなときなのに、思わず伊織が見とれてしまったくらい、すらりとした脚がまっすぐ、美しく伸びる。鈍く重々しい音とともに、拳銃が畳に落ちた。黒揚羽はそれを拾い上げたが、構えることはせず、腕を下ろしたまま男を見据えた。

「伊織、どうしたの!？」

「今の音何だ!？」

突然、階下から切迫した声が聞こえた。とたんに男は身をひるがえず。先程の苦痛が残っているのだろう、いくらか前かがみになりながらも、窓から屋根に飛び下りた。

一方、黒揚羽はあとを追うことはせず、視線を伊織に移した。

「悪いが、その鏡、しばらく預からせてもらってもいいか？」

「え……」

思わぬ台詞に、伊織は目を白黒させる。

「調べたいことがあるし、おまえが持っている、また今日のように狙われるかもしれないからな。大丈夫だ、盗るわけじゃない。それに、近いうちにまた来る」

黒揚羽の声には真摯な響きがにじみ出ている。伊織は自分の直感を信じることにした。恋文でも渡すように、両腕をまっすぐ伸ばして手鏡を差し出す。

自ら頼んだにもかかわらず、黒揚羽は一瞬驚いたような目をしたが、

「ありがとう」

手鏡を受け取ると、心なしか弾んだ声で言った。足音と階段のきしむ音は、すぐそこまで迫ってきている。黒揚羽は身をひるがえすと、窓枠をつかみ、その名のとおりに蝶のように身軽く体を持ち上げた。同時に、

「伊織？ 開けるわよ？」

由紀子の声がして、勢いよくふすまが開く。

「きゃっ！」

「うわっ！」

黒揚羽の後ろ姿を目にした両親が叫んだ。だが親たるものの性で、不審な影の正体より、まずは我が子のことが心配らしい。窓に駆け寄るでも、通りを見下ろすでもなく、

「何だ！？ 今の泥棒か？」

「大丈夫？ 怪我はない？」

立ち尽くしている伊織に質問を浴びせた。由紀子などは、すぐりつくように伊織の肩をつかんで、今にも泣き出さんばかりに顔をゆがめている。

「うん、僕は大丈夫」

伊織は何度かうなずいてみせて、

「泥棒……というより一人は強盗で、もう一人は」

未だ夢から覚めやらぬような心地で言った。

「黒揚羽だったよ」

第二章 手鏡の秘密(一)(前書き)

第二章、やや長いので二つに分割します。

第二章 手鏡の秘密（一）

繁が公衆電話から一一〇番通報すると、数名の警官が駆けつけた。ただの居空きや出来心の強盗ではなく、一人は拳銃を所持していたということ、一人は天下に名だたる黒揚羽だったということで、警官たちも目の色を変えた。尋問された伊織は、二つのことを除いては事実を述べた。黒揚羽の足を引く張るようなことは言いたくなく、すがすがしく、あまりにもわからないことが多すぎて、何が彼女にとって不利な情報なのかさえ判断できなかったのだ。伏せておいたことそれはもちろん、黒揚羽が再訪を誓ったことと、望まれるまま彼女に鏡を手渡したことだ。事件の鍵が鏡にあると知った警察は、繁と由紀子に伊織の出生について尋ねたが、二人とも事情を説明し、自分たちもよく知らないと答えるしかなかった。

結局、伊織たちが再び床に就いたのは明け方になってからだ。当日はまだ身辺は静かであったが、翌日には噂が広まってしまったらしい。伊織は登校すれば同級生たちに取り囲まれ、由紀子は表を歩けば、近所の奥さん連中に呼び止められるはめになったのである。

そんな落ち着かない日々が数日続いた。毎晩伊織は、

（黒揚羽はいつ来るのか、本当に来るのか）

と、懷疑混じりの期待をもって眠りに落ちた。

土曜日のことである。昼食にそうめんをすすったあと、伊織はうちわ片手に、足を投げ出してくつろいでいた。開け放した障子の先に降り注ぐ陽光が、別世界のもののようにまぶしく目に沁みて、やかましい蝉の声に交じって、どこからか風鈴の澄んだ音が響いてくる。自然とまぶたが下がってくるような、気だるいが満ち足りた昼下がりが。繁などは、座布団を枕にもういびきをかいていた。

不意に、トントンと玄関の戸を叩く音がして、

「はい」

皿を洗っていた由紀子が、手を拭き拭き出ていった。

「あのう、失礼ですけど、どちらさまでしょうか？」

見知らぬ人間らしいが、押し売りだろうか。伊織は耳を澄ませたが、相手の声は表に流れてしまいうらしく、聞こえるのは由紀子の声ばかりだ。

「あらまあ。今呼んできますから、ちよつと待っててちようだいね」その言葉に伊織は身を起こした。由紀子の言葉遣いからして、やってきたのは知り合い。それも、父ではなく自分の友人のようだ。

居間に戻ってきた由紀子は、満面の笑みを浮かべて、

「伊織、あなたにお客さんよ。学校のお友達ですって。とつても可愛い女の子」

「えっ？」

伊織は耳を疑った。当たり障りのない会話を交わすような仲の女生徒なら、クラスに何人かいるものの、家を訪ねてくるほど親しい間柄の子なんて、どう頭をひねっても思い当たらない。ひよつとして、野次馬根性の旺盛な誰かが、先日の事件についてさらに詳しく聞き出すべく、押しかけてきたのだろうか。そう思うといささかうんざりしたが、さすがに上下ともに下着一枚といういでたちで、女の子の前に出るわけにはいかない。あわてて二階に上がって身支度を整えてきた。

玄関に出ると、セーラー服姿の、すらりとした背の高い少女が立っていた。白いラインの三本入った紺色の襟えりに、臙脂色えんじのスカート、紺色のひだスカート、たしかに伊織の高校の制服である。

一目見て伊織は息を呑んだ。由紀子の言ったとおり、いや、それ以上の、非の打ちどころのない美少女だ。黒曜石の瞳、白磁の肌、桃の花のような唇、腰まである濡れ羽色の髪。まなじりが切れ上がっているのが、ややきつい印象を与えるが、それも少女の魅力を損なう要因にはなっていない。

おかしなことに、伊織には彼女にまったく見覚えがなかった。こ

れほどの美少女、クラス内にいたり、登下校時や行事で顔を合わせ
ていたりすれば、必ずや印象に残っているだろう。そうでなくても、
男子の間で話題になりそうなものだ。

「待たせてごめん。ええと……君、何組の子？ どこで会ったのか
な？ 言いにいくんだけど、ちょっと思い出せなくて」

あまつさえ緊張しているのに、自分だけ相手の顔を忘れていると
あつては、気まずさもひとしおだ。

「会った場所？ おまえの家じゃないか、伊織」

少女はふつと微笑し、からかうように言った。

「君……いや、あなたは！」

二重の意味で伊織は驚愕した。一つはもちろん少女の正体に、も
う一つは、その「正体」に当たる人物がこんなうら若い いや、
幼いと言ってもいい年恰好だということに、である。

「約束どおり、また来たぞ。泥棒に二言ふたごはない……なんてことわざ
はないが」

とにかく、伊織は少女 黒揚羽を家に引き入れた。戸の閉まる
音を聞いて様子を見に来た両親に、

「おじさま、おばさま、突然お邪魔してすみません」

黒揚羽は、良家の令嬢としか思われぬ上品さでおじぎをした。声
音まで、鈴を鳴らすような高いものに変わっている。

「いえいえ、どうぞゆっくりしていい。すぐにお茶をお出ししま
すから」

由紀子は愛想よく応対し、繁は浅黒い顔を赤らめて、「いやあ、
どうも」などと他愛ない言葉を繰り返す。男はいくつになっても美
人には弱いものだ。だが、伊織は気が気ではなく、背中を押すよう
にして黒揚羽を自分の部屋に連れていった。

間もなく由紀子が、氷を入れた来客用の緑茶と、三角形に切った
すいかを運んできた。戻ろうとするところに駆け寄って、

「あのさ、あの子がいる間はそつとしておいてくれる？ いや、別
にその、やましいことをするってわけじゃないんだけど……」

伊織は両手を合わせて頼んだ。一応は犯罪者である黒揚羽を警察にも突き出さず、自室に招き入れているのだから、これも一種の「やましいこと」なのかもしれないが、言葉のあやというものだ。

「わかっているわよ。大丈夫、母さん、伊織を信頼してるから」

由紀子は陽気に伊織の肩を叩いた。あとでどれだけ話の種にされるかと思うと気が重いのが、やむを得まい。

由紀子の足音が遠ざかると、伊織は表にも話し声がもれないように、窓を閉めた。

「なかなか気が利くじゃないか」

「ちょこなんと正座していた黒揚羽が言い、

「いただきます」

コップに手を伸ばしてお茶をすすった。伊織も彼女の前に腰を下ろす。訊きたいことは山ほどあったが、どこから切り出してよいやらわからず、

「その制服は……?」

とつさに口をついて出たのはそんな質問だった。

「これか?」

黒揚羽はスカーフをつまみ、ずいと身を乗り出した。伊織はどきまぎしたが、何のことはない、小声でも聞こえるようにという配慮だろう。

「おまえの学校に転入するという口実で仕立ててもらったんだ。これなら万一看張りがいても、やつらの目をごまかせるだろう? さつきのおまえがそうだったように、制服を着て白昼堂々現れれば、よもや私が黒揚羽だとは思わないからね」

「見張りって……この家にですか?」

「ああ」

「もしかして、あのときの男が?」

「あいつ本人だとは言いきれないけど、仲間ではあるだろうな」

さらに質問を浴びせようとした伊織を、

「ちょっと待った」

黒揚羽は手を上げて制した。

「私が順を追って、あの事件の背景を説明する。そのほうが手っ取り早いだろう」

「あ、はい」

自分が先走ってしまったことに気づき、伊織は赤くなってうなずく。

「まず、おまえの出生について話したいのだが、心の準備はできているか？ 本当なら、赤の他人の私が教えることじゃないが、ここを通らなきゃ話が進まないし、いずれもうすぐわかることだし」

どうしてそんなことを黒揚羽が知っているのだろう、という疑問は、この際後回しだ。伊織は一瞬ためらったが、あの日以来、この問題に向き合わなければならぬ時期が来ていることには、うすうす気づいていた。ここで否と言うほど意気地なしではないつもりだし、好奇心にも勝てなかった。それは好奇心というより、自分のアイデンティティーをはっきりさせたいという、人間としての自然な欲求だったかもしれない。

「大丈夫です。ぜひ教えてください」

伊織が意を決した表情で言うと、

「よかった。じゃあ、本題に入ろう」

そう前置きして、黒揚羽はおもむろに膝を崩した。

「おまえの父方の一族は鈴倉家すずくらといって、南伊豆のほうの名士なんだ。音の鳴る鈴に、倉庫の倉と書く」

伊織は頭の中で漢字を思い浮かべる。

「鈴倉海産って会社を知らないか？ 苗字をカタカナにして、商標に使っているんだが」

「もしかして、缶詰とか乾物とかで有名な？」

「そう、海産物の加工食品の会社だ。あそこを経営してるのが鈴倉家だよ。そして、鈴倉家の跡継ぎで現社長の数馬さんと、鈴倉海産の工場で働いていた秋子さんとの間に生まれたのが、おまえなんだ、伊織」

そう言われてもすぐには実感が湧かず、伊織は何だか他人事ひとごとのよ
うな気持ちで聞いていた。

「数馬さんは、遊びではなく、秋子さんを本気で愛していたようだ。
息子のおまえも生まれたし、正式に妻にするつもりだったらしい。
だが、いかんせん身分違いの恋だろう。周囲の……特に数馬さんの
父、総一郎の猛反対に遭って破局したんだ。おまけに、数馬さんは
ほかの女性と結婚させられてしまった。秋子さんはおまえを生んで
しばらくして、いたたまれなくなって町を出た」

「それで……」

伊織は一瞬迷った末、

「秋子さんは、東京に流れてきたんですね」

この呼び方を選んだ。由紀子以外の女性を「母さん」や「母」と
呼ぶのには、抵抗があったからだ。

「ああ」

「じゃあ、あの鏡は？」

「あれは鈴倉家に代々伝わる……ちょっと言い方が大袈裟だが、家
宝みたいなものだよ。鈴倉家の家紋は梅なんだ。実は紅梅のもの
ほかに、もう一面白梅のものがあって、対になっている。おおかた、
将来を誓った証にでも、数馬さんが秋子さんに紅梅のほうを贈った
のだろう」

「どうして秋子さんは、別れるとき鏡を返さなかったんでしょう？」

「さあ……。そのときもまだ数馬さんを愛していたからかもしれないな
いし、自分に憂き目を見せた鈴倉家に、一矢報いてやろうという気
持ちがあったからかもしれない。こればかりは私にもわからないさ。
家宝の片割れを持っていかれたものだから、総一郎はあわてて追っ
手を出したが、ついに秋子さんを見つけることはできなかった」

生みの母の人生を初めて知り、伊織は感慨のため息をつく。

「そしてこの前の強盗は、鈴倉家が……というより、おまえの祖父
であり鈴倉海産の会長でもある、総一郎が雇った男だ。ただし理由
は教えられず、単に鏡を盗むよう命じられただけ。総一郎はいろいろ

る後ろ暗いところのある男で、ならず者の一人や二人、雇うくらい
わけないのさ」

「そうだったんですか……」

祖父といつても顔も見覚えておらず、まして愛し合っていた数馬
と秋子を引き裂いた男だ。肉親に強盗を差し向けられたというシヨ
ツクは薄かったが、

「だけど、一度はあきらめたものを、どうして今になって、また奪
い返そうとするんですか？」

「それにはまた理由があつてね。今度は、十五年前どころじゃなく
古い話になる」

黒揚羽の瞳が輝いた。夢見る少女の輝きというよりは、獲物を見
つけた狩人のそれだ。

「下田の町は江戸時代初期に発展を遂げた。鈴倉家は、それに伴い
勢力を伸ばした豪商で、一時は伊豆でも一、二を争うほどだったの
さ。ところが元禄のころ、抜け荷のかどで告発され、商売も家もつ
ぶされてしまった。鈴倉一族は、商売敵の讒言さんげんによる濡れ衣だと主
張しているがね」

黒揚羽はひよいと肩をすくめて、

「さて、当時の鈴倉家の主は鋭敏な男で、自分たちに嫌疑がかけら
れていることを察していた。どうあがいても罪を逃れられないと知
った彼は、財産をかき集め、番頭をはじめ本当に信頼している奉公
人たちに隠させた。そして、一对の鏡を幼い息子に託し、妻と番頭
とともに逃がしたんだ。その後主は死罪、一族も罪に問われ、家財
は没収された。鈴倉家が再興したのは、明治になって鈴倉左門さもんが鈴
倉海産を創業してからさ。だが、逃げ延びたはずの妻と番頭も、主
の息子に鏡の秘密を教える間もなく命を落としてしまったらしい。
財産のありかは子孫に伝わらず、手鏡だけが受け継がれた。いわゆ
る埋蔵金となつたわけだね」

「埋蔵金!？」

伊織はすつとんきょうな声を上げた。

「眉唾ものだと思うか？ 正直なところ、つい最近までは私もそう思っていたし、当の鈴倉家の人たちだって同様だっただろうな。有名な徳川幕府、秀吉、結城家ゆうぎのをはじめ、埋蔵金伝説というのは全国各地に残っているが、多くの人々が挑戦しているのにもかかわらず、未だに発見されていないものばかりなんだから。だが鈴倉家の場合、総一郎が、手入れをしようとして鏡を落としてしまったことをきっかけに、話は一変した。鏡の柄えの部分の外れるようになって、その中に空洞があり、紙切れが収められていることがわかったんだ。その紙切れに不可解な文章が記されていたのさ」

今度は伊織は声を上げることせず、ただ目をみはっていた。

「これは暗号文……それも鏡の由来からして、例の埋蔵金のありかを示したものではないか、と考えた総一郎は色めきたった。あの鏡は、十七世紀末から十八世紀初頭のものだと鑑定されているから、時代も一致している。だが、暗号はどうしても解けなかったし、でなくとも対になっている鏡なのだから、暗号文も二つに分けて隠されていると考えるのが自然だ」

「だから、僕の鏡を盗みに……」

もともと、こういう古風でロマンチックな物語に慣れ親しんでいた伊織だ。まして、話を持ってきたのは、存在自体がロマンチックな黒揚羽と来ている。埋蔵金の有無や暗号文の真偽については未だ半信半疑だったが、理性に反して心が浮き立つのは抑えられなかった。

「そういうことだよ」

「だけど、よく僕の居場所を突き止められましたね」

「うん。おそらく、十五年前からある程度突き止めていたんだと思う。ただ言いにくいことだが、秋子さんが陽の当たる暮らしをしていなかったのと、あんな時代だったから鈴倉海産の経営も苦しく、総一郎にも余裕がなかったのとで、行きづまってしまったんだろう」

黒揚羽が言葉を切ると、二人の間にはしばし沈黙が落ちた。気がつけば、閉めきった部屋はひどく蒸し暑くなっており、ぬぐって

ぬぐつても汗が噴き出してくる。黒揚羽の額にも玉の汗が浮かんでいた。

黒揚羽は両手で髪を持ち上げると、ぱつと離して風をはらませた。傍らの鞆を引き寄せて、伊織には見慣れた風呂敷包みを取り出す。黒揚羽がほどくと、川に紅梅の花が散るさまを、金と朱金で描いた、漆塗りの手鏡が現れた。

「柄の部分を強く引つ張つてごらん」

黒揚羽に促され、伊織は鏡を手にとって、柄をつかんで恐る恐る引つ張つた。何度か力をこめてみると、不意に手ごたえが軽くなつて柄が外れる。川の絵柄の輪郭に沿うように外れるため、一見こんな切れ込みがあるうとはわからないのだ。伊織が柄の空洞をのぞき込むと、

「悪いが、暗号文はこつちだ。いちいちその中に出し入れするのは面倒だからね」

黒揚羽は胸元から、楕円形の銀のロケットを取り出し、ふたを開けた。古いものと新しいもの、二枚の紙片が小さく折りたたまれて入っている。

「こつちが鏡に収められていたもの、こつちは読みやすいよう私が書き直したもの」

説明しながら、黒揚羽は丁寧に紙片を開き、畳の上を滑らせるように差し出した。伊織は手に取ってしげしげと眺める。

もおおつじおのならちいにをすみいしいをすまわしこよおこつでつんきとろのかしく

「も、お、お、つ、じ……」

思わず読み上げてしまい、あわてて口をつぐんだ。まさか真つ昼間から外壁に張りついている間抜けな偵察者がいるはずもなし、盗み聞きされる心配はないと思うが、念には念を入れよだ。

試みに逆さに読んでみたり、文字を飛ばして読んでみたりしたが、

さっぱり意味が通じない。伊織はあきらめて紙片を畳の上に戻した。もっとも落ち込む必要はない。もう一方の暗号文も単独では解けないものらしいから、こちらも同様と見てよいだろう。

「それで……あなたは宝探しをするんですね？」

「もちろん。機をうかがって、白梅の鏡の暗号文も手に入れてね。

肝心の内容は、私もまだ知らないんだ。何しろ、総一郎の警戒ぶりは相当なものだね。鏡は書斎の金庫に収めておいて、暗号文が出てきたってことも、執事の佐々木って男にしか教えていないのだから」「家族にも、ですか？」

「ああ。数馬さんは人が好すぎるし、自分の妻たる絹枝さんのことは軽んじている。ほかの親族にはいさかいのもとだと思っているのだろう。ただでさえ、円満とはいかない一族なのだから」

「円満とはいかない……？ 家督争いでも起こっているのですか？」

「争いというほどのものでもないがね。総一郎には、数馬さんの下にもう一人息子が……つまりおまえにとつての叔父がいる。この男がなかなか強欲で野心家だね。長男だからという理由で、おとなしい数馬さんが総一郎のあとを継いだことに、不満たらたらなのさ。ここで埋蔵金なんぞ出てきたら、一悶着起ひともんぢやくこるに決まってる」

「はあ……。お金がありすぎるのも楽じゃありませんね」

伊織は訳知り顔でうなずいたが、

「でもそれじゃ、あなたはどうして知っているんですか？ さっきの話だと、はじめから暗号文が眠っていると考えて、鈴倉家を調査していたわけではないのでしょうか？」

そのとたん、今まであまり表情を変えなかった、まして負の感情などまったく見せなかった黒揚羽が、ふっと瞳をかげらせた。埋蔵金の話を疑っているように聞こえて、誇りを傷つけてしまったのか、と伊織は案じたが、すぐに黒揚羽は顔から憂いをぬぐい去って、

「実は、総一郎には私怨があつてね。次の標的にしようと思つて、手下を鈴倉家に送り込んでいたんだ。そうしたら、彼女が暗号文の話を探り出してきた。これはいい、埋蔵金を頂戴してやったら、総

一郎への恨みも晴らせるし、莫大な財宝も手に入るし、一石二鳥だと思つたわけさ。いや……一石三鳥かもしれないな。加えて宝探しのスリルも味わえるのだから」

黒揚羽はにっこりして、

「そうそう、埋蔵金が見つかったら、一部はおまえにも分けるよ」「えっ！」

「莫大な財宝」に魅力を覚えないはずはないが、生まれてこの方平凡な暮らしをしてきた伊織には、具体的にイメージできるものではない。まして、一部とはいえ、それが自分のもとに舞い込むなんて考えてもいなかった。

「だって、埋蔵金は本来総一郎のものなんだから、孫たるおまえには何分の一かを相続する権利があるんだよ」

「僕のことには気にしなくても……」

「おいおい、私が仕事をするときの主義は、おまえも知っているだろう？ 金持ちでもなければ非道でもない……標的の条件に当てはまらないおまえから、間接的とはいえ、財産を横取りするわけにはいかないのさ」

まだ困惑した顔をしている伊織を見て、黒揚羽は首をかしげると、
「まあ、いやだというものを無理に押しつけるつもりはないが」「いえ、いやだとまでは言いませんが……」

伊織はあわててかぶりを振った。もらえらるとなると戸惑うが、もらえないとなると惜しくなるのだから、金とは厄介なものであり、人間とは因果な生き物である。

「煮えきらないな」

黒揚羽は呆れたように肩をすくめた。

「まあいい。捕らぬ狸の皮算用はこのくらいにしておこう。それより、もう一つおまえに伝えておきたいことがあるんだ」

「何ですか？」

「近いうちに、おまえのもとに鈴倉家から使いが来ると思う」

「え？ 祖父は、鏡があなたの手に移ったことを知らないんですか」

「？」

「そうじゃない。あのならず者が報告したみたいだからね」

「じゃあどうして？ 祖父にとって、僕はもう用済みなはずでしょう？」

「そんな自虐的な言い方をするものじゃない」

黒揚羽は軽くたしなめたが、

「もっとも、『そんなことはない』と否定はできないのが悲しいところだな。総一郎は、おまえが暗号文の存在を知っている可能性を考えているらしいんだ」

「そこまで気を回しているのですか？ あんなに巧妙に隠されていたら、普通は気づかないと思いますか……」

「でも、総一郎に訪れたような偶然が、おまえにも降りかかるかもしれないからね。あまり当てにはしていないだろうし、総一郎が今躍起になっているのは、むしろ私の行方を捜すことのほうだけれど」

伊織ははつとする。

「そうですね。大丈夫なのですか？」

「ああ。ここでしつぽをつかませるような私じゃないさ」

黒揚羽の瞳には青い炎のような闘志が揺らめいたが、口調は落ち着いており、自信のほどをうかがわせた。

「それから、総一郎の目的は暗号文にしかないが、数馬さんは純粹におまえに会いたがっている」

伊織はぴくりと顔を上下させた。実の父に会えるといっても、喜びより緊張や戸惑いが先に立つ。総一郎の圧力に屈し、自分と秋子を見捨てた数馬を非難するつもりはないが、十五年間他人同然に過ごしてきたのだ。今更どうふるまえばいいのか、何を話せばよいかわからない。

「使いが来るだけじゃなくて、伊豆の鈴倉邸に呼ばれるかもしれない。そうしたら、私ともきつとまた会える」

「本当ですか？」

むしろ、伊織にはそのことのほうが嬉しかった。

「よかつたら、向こうでも宝探しのお手伝いをさせてください。お金が欲しいっていうよりも、あの……僕、探偵小説が好きで」

机の上ののっている『奇巖城』や、本箱に代用しているみかん箱に目をやる。

「埋蔵金や暗号なんて聞くと、もうわくわくしてしまっただけ」

何気なく申し出たつもりだったが、黒揚羽は伊織をまじまじと見つめて、

「おまえ、変わっているな。ためらいなく鏡を渡してくれたときも思ったが……」

呆れたような感心したようなため息ののちにつぶやく。

「世間にも私をもてはやしている連中はいるが、それはあくまで表面的で気まぐれな興味、進んで協力してくれる人なんていないと思っていた」

黒揚羽はふと遠い目をして感慨をもらすと、

「異存はないよ。もともとあの鏡はおまえのものなんだし、利己的なことを言わせてもらえば、鈴倉家の一族の中に、味方がいるというのは好都合だ」

「ありがとうございます！」

伊織は顔を輝かせ、軽く頭を下げたが、

「だけど、信頼できないとか、裏切るんじゃないかとか、考えないのですか？」

ふと、知り合って間もない自分の介入を許した、黒揚羽の無防備さが気にかかった。

「自分から志願しておいて、何を言い出すんだか。これでも人を見る目はあるつもりさ。でなければやっていけない」

胸を張ってみせてから、黒揚羽は伊織と同様の不安 というより疑問にとらわれたらしい。眉をひそめて、

「そういうおまえこそ、心配じゃないのか？ 怪盗なんてしゃれた肩書きを掲げてはいるが、私は結局泥棒なんだぞ」

「いえ、そんな」

伊織はあわててかぶりを振った。

「僕、あなたに憧れていたんです。泥棒は泥棒でも、あなたみたいに稚気があつて、自分のルールを守って行動している人が、悪人のはずはありません」

一息に告げてから、伊織はぱつと顔を赤らめた。普段の彼なら、若い女性に向かつて「憧れていた」などと口にする勇氣は、到底なかつただろう。

「これはまた、ずいぶん高く買ってもらつたものだね」

黒揚羽はおかしそうに、またいささか面映ゆそうに唇をほころばせて、

「それじゃあ、おまえが向こうに着いたら連絡するよ。さつきも話したとおり、屋敷には私の手下が潜入しているから、その子に話をつけておく」

「わかりました」

少しの間待って、黒揚羽からほかに指示がないことを察すると、

「あの……一つ伺つてもいいですか？」

伊織は気になってしかたがなかつたことを尋ねるべく、遠慮がちに切り出した。

「何？」

「どうしてそんな……ちょっと変わった言葉遣いなんですか？」

黒揚羽は目をしばたいて、

「ああ。これは父親代わりの人の言葉遣いを真似ているうち、癖になつてしまつてね。ぶしつけに聞こえたら謝るよ」

「いえ、そういうわけじゃ」

伊織は手を横に振った。実際、いきなり男言葉で「おまえ」呼ばわりされて、面食らいはしたものの、不思議と不快ではなかつた。

「ならいい。私に言わせれば、おまえこそどうしていつまでも敬語なんだ？」

「どうして……」

初対面も同然であり、敬意を寄せていた相手の前だから、つか

しこまってしまふのだった。

「もつとくだけた口調でいいよ。文字どおりの意味でも、比喩的な意味でも、私はしょっちゅう仮面をかぶっているんだ。肩が凝るのは好きじゃない。まして、おまえと私は首領と手下ってわけじゃない、対等な関係にあるのだから」

「そういうことなら、やめます……じゃなくて、ええと、やめるよ」
伊織がぎこちなく言って目を伏せると、黒揚羽の手が視界に入ってきた。数秒かかって、握手を求められているのだということに気づく。伊織は胸をどきどきさせながら、遠慮がちに白くしなやかな手を握った。

「さあ、そうと決まったら、すいかをいただくとしよう」

黒揚羽の提案で、二人は生ぬるくなつたすいかにかぶりついた。かくして、一人は女学生に扮した怪盗、一人は数奇な運命を背負つた少年、という組み合わせの男女が、向かい合つて黙々とおやつを食べるといふ、奇妙な光景が出現したのである。

繁と由紀子の姿を探すと、二人も居間でお茶を飲んでるところだった。

「おじさま、おばさま、私そろそろおいとましますわ」

「まあ、もう帰るの?」

由紀子が腰を上げ、歩み寄ってきた。

「はい。このあとピアノのおけいこがありますので」

黒揚羽は真つ赤な嘘をつく。いや、怪盗がピアノを習つてはいけないという法はないが、おそらく嘘なのだろう。

「もっとゆっくりしていつてほしかったのに、残念だわ。でも、ピアノが弾けるなんて素敵ねえ。頑張つてね」

「ありがとうございます。今日はお邪魔しました」

「いえいえ。またいらしてね。頼りない子だけど、これからも伊織と仲良くしてくれると嬉しいわ」

由紀子に名残を惜しまれながら、黒揚羽は中野家をあとにした。

その夜、両親の追及と冷やかに、伊織が辟易へきえきさせられたことは言
うまでもない。

第二章 手鏡の秘密（二）

黒揚羽の予告に誤りはなかった。

翌日の夕食時、両親はいやに寡黙で、深刻な顔をし、そのくせ妙にそわそわしていた。伊織にはぴんときたが、「どうしたの」と訊いてみるのものはばかられたので、気まずい空気をやり過ごした。

食卓が片づくど、

「伊織、ちよつとここにいてくれ。大事な話があるんだ」

繁が真面目な口調で言った。いつもは真つ先に洗い物を済ませてしまふ由紀子も、今日は食器を流しに運んだだけで戻ってきて、繁の隣に座る。伊織が身構えたのを見て、

「いや、何もお説教とかお小言とかあっていうんじゃない」

繁は力なく笑ったが、すぐに表情を硬くした。

「おまえの……出生のことだね」

伊織は黙ってうつむいた。本当なら、もっと驚いてみせたほうが自然だったのかもしれないが、この二人の前でそう神経をとがらせる必要もないだろう。

「夕方、うちにこんな手紙が来たんだ」

繁が、上質そうな白い封筒と便箋を重ねて、伊織の前に差し出した。伊織が手に取ると、案の定、差出人は鈴倉総一郎、住所は静岡県賀茂郡下田町となっている。

「読んでごらん」

繁に促され、伊織は便箋を開いた。

前略 突然お手紙を差し上げると無礼をお許し下さい。

老生は、株式会社鈴倉海産の会長を務めております、鈴倉総一郎と申す者です。

この度、「黒揚羽」を名乗る女賊によぞくの被害に遭われたとの由、新聞

にて知りました。衷心こころこぼしよりお見舞い申し上げます。

その際、かの女賊の強奪したものが、古色蒼然たる漆塗りの手鏡だったとの由ですが、その特徴から鑑みるに、その手鏡は元々拙宅に所蔵されていた品ではないかと思われます。十五年程前、故あって老生の手元を離れてしまい、以来氣に掛けておりました。

かの手鏡が我が鈴倉家のものであるならば、ご子息伊織君のご生母こそ、それを持ち出した人物ということに相成ります。

本件については更にお話ししたいことがございますが、書面にてご説明するのは限りがございますし、またそれに相応しい内容とも思われません。宜しければ、お二方のご都合の良い日時を伺った上で、貴宅に代理の者を遣わせたいと思ひますが、如何でしょうか。事が事ですので、伊織君にもせひご同席の程お願い致します。

取り急ぎ、用件のみにて失礼致します。鶴首してお返事をお待ち申し上げます。

草々

七月八日

鈴倉総一郎

中野繁様

由紀子様

伊織が顔を上げると、

「そういうことだ」

繁は重々しくうなずいた。

「十五年間わからなかったものが、今になってねえ。こないだの事件で鏡のことが取り沙汰されてから、もしやという予感はしていたけれど」

傍らで由紀子がしんみりと述懐する。

「それで……父さんと母さんはどうするの？ 鈴倉さんの申し出に
応じるの？」

「ああ。先方の意向も考慮しなけりやならんし、折角機会がめぐってきたのだから、親としておまえの出自を知っておいたほうがいいという気もする。もちろん、そのせいでおまえに対する愛情が変わるなんてことは、絶対ないぞ」

「そうよ、伊織。何があっても、あなたは私たちの息子なんだから、由紀子が情熱をこめて同意する。」

「わかってるよ」

胸が温かくなるのを感じながらも、やはり照れくさく、口調がいくらかそっけなくなってしまう。

「伊織はどうなんだ？ やっぱり自分の出自とか、生みの父さん母さんのことが気になるか？ それとも逆に、わからないままにしておきたいか？」

「僕も……父さん母さんと一緒だよ。自分のことだもの、できればはつきりさせたいよ」

いくばくかの後ろめたさとともに、だがきっぱりと伊織は答える。「本当に……いいんだな？」

「うん」

今度は繁は由紀子のほうを向いて、

「おまえも？」

「ええ」

どこか淋しげな顔ながら、ためらいなく由紀子は答えた。

「よし。それじゃあ返事を出すとしよう」

吹っきたような、あるいは自分を鼓舞するような、決然とした繁の一言で、その話は締めくくられた。さりとしてほかの話題を切り出す者もおらず、立ち去るきっかけもつかめず、三者三様の思いを胸に宿しながら、彼らはしばし無言でその場に留まっていた。

「ごめんください」

約束の時刻より五分ほど早く、朗々たる男の声が居間の緊張を破った。逡巡と焦慮という相反する感情を顔に浮かべたあと、繁と由紀子が玄關に迎えに出る。

案内されてきたのは、五十歳前後と思われる、謹厳実直を絵に描いたような紳士だった。長身かつ痩せ型で、細長い顔に黒縁の丸眼鏡をかけ、コールマンひげを生やしている。

「あなたが伊織様ですか」

「はい、初めまして」

伊織は声も体も強張らせて答えた。

「初めまして。と申しましても、実はあなたがみどりごでいらつしやる時分、一度お目にかかったことがあるのですよ。大きくなられたものですねあ」

紳士は眼鏡を押し上げ、目をしばたたいて懐かしげに伊織を見つめた。

「は、はあ……」

伊織が返答に窮していると、

「伊豆からはるばるいらして、お疲れでしょう。どうぞお座りになつてください」

繁が紳士に座布団を勧めた。

「これはどうも」

紳士は静かに正座し、

「改めまして、わたくし鈴倉家執事の佐々木と申します。父の代から鈴倉家にお仕えしておりまして、総一郎様には光栄にも並々ならぬご信頼を寄せていただいております」

執事の佐々木といえば、総一郎が暗号文の存在を明かした唯一の人物だ、と伊織は思い出した。誠実そうな顔をしているからといって油断ならないぞ、と気を引きしめる。

「では早速、書状にてお伝えした件ですが……」

佐々木はよどみなく、伊織と鈴倉家の関係について語った。その内容は黒揚羽の話とおおむね一致していた。相違点といえば、数馬

と由紀子の交際のくだりに、数馬は秋子に軽い気持ちで手をつけたのだが、秋子が熱を上げてしまったため、引きずられるように交際を続けてしまった、というニュアンスが含まれていたところと、当然ながら暗号文のことや、総一郎が強盗を差し向けた張本人だということなど、おくびにも出さなかったところである。繁と由紀子は終始目を丸くして耳を傾けていたが、伊織は初めて聞いたような顔をするのに苦労していた。

「総一郎様、数馬様、総一郎様の奥様絹枝様は、大変あなたに会いたがっていらっしやいます。昔は数馬様と秋子さんの仲を認められなかった総一郎様ですが、それも鈴倉家のためによかれと思つてなされたこと、伊織様を憎んでいらっしやったわけではございません。また、お年を召されて情にもろくなつたところもおありなのでしよう。奇跡のような偶然で孫の居場所がわかつた、これも神様仏様のお導きだらう。一目顔を見たいものだ、こうおっしゃるのでございます」

佐々木はまことしやかに述べた。

「いかがでしょうか？ 折しも伊織様はもうすぐ夏休みでございます。ほんの一週間ばかり、鈴倉家でお預かりさせていただくにはまいりませんか？」

繁と由紀子は顔を見合わせた。

「ですが、数馬さんとやらには奥さんもお子さんもいらっしやるのでしよう？ そこに伊織がこのこお邪魔するというのは……」

「ご心配はごもつともですが、ご安心くださいませ。奥様の志摩子様もご子息の八雲様も、お心優しい方々ですから、こだわりなく歓迎してまいりますよ」

二人の顔から不安は払拭されてはいなかったが、

「だとすれば、私たちがどうこう言える問題じゃありません。せがれさえいいと言つなら……」

「どうする？ 伊織」

由紀子に小声で打診されて、

「僕は構わないけど……」

伊織は答えた。

「よろしいですか。ありがとう存じます。総一郎様も数馬様も、さぞお喜びになることでしょう」

佐々木は両手を握り合わせ、おもむろにこうべを垂れた。

「して、伊織様はいつごろがお暇でしょうか？ いずれにせよ、お盆は避けようと思っておりますが」

「ええと、七月の二十一日から二十八日までの平日は、学校の補習があります、それ以外ならいつでも……」

「かしこまりました」

佐々木は満足そうにうなずいて、

「ようございました。実は、八月の五日、総一郎様が古希をお迎えになりますので、祝賀会を開く手はずになっているのでございます。それにぜひ、伊織様にも参加していただきたいと考えているのですよ」

伊織が気後れしたのを察してか、

「何、祝賀会と申しましたが、総一郎様のご意向を反映して、身内や親しいご友人ばかりを集めた私的なものに致します。堅苦しくお考えになることはございませんよ」

佐々木は如才なく付け加え、てきぱきと日程を決めた。

その後、細かい打ち合わせや交通経路の説明をすると、

「そろそろおいとまいたします」

佐々木は腰を上げた。だが、ワイシャツの襟を正しながら、ふと思い出したように、

「そういえば、あの手鏡ですが、お宅にある間に、落としたりぶつかけたりということはございましたか？」

伊織はどきりとした。何気ないふりをして佐々木の顔を見上げると、心なしか、眼鏡の奥の目が鋭く光っているような気がする。

「いいえ、特にありませんが……。どうしてそんなことを？」

何も知らない繁が怪訝そうに尋ねる。

「いえいえ、保存状態が気にかかっただけですよ。お気を悪くされたとしたら、申し訳ございません」

佐々木はあっさり引き下がり、あとは紋切り型のあいさつをして帰っていった。

「驚いたな」

佐々木を見送って居間に戻ると、繁が興奮冷めやらぬ顔でもらした。

「おまえが有名企業の社長さんのご令息だったとはなあ。おまえと……秋子さんを見つけたあの日から、何かいわくがあるのだろうとは思っていたが」

「本当にねえ。事實は小説より奇なり、っていうのはこのことだわ」
由紀子も頬を紅潮させて言う。

「うん。僕もまだ信じられないよ」

これは伊織の正直な感想だった。

「だが、何もかも教えてもらって、かえってすっきりしたな」

「ええ。あんな思わせぶりな手紙じゃ、不安だったけれど」

実際に、両親は憑きものの落ちたような顔で、口元に穏やかな笑みさえ浮かべていた。そこには、生殺しの状態から抜け出した爽快感だけではなく、先方が伊織を引き取るなどと言い出さなかったことへの安堵も含まれていたのだろう。

「まあ、それだけおまえに会いたがっているというなら、悪いようにはしないだろう。楽しんでおいで、というのは不穏当かもしれないが、あまりぴりぴりすることもないさ」

「逆に、鈴倉のお宅と伊豆の土地を気に入って、こっちで暮らすんだなんて言い出したりしてね」

由紀子がいたずらっぽく伊織を横目で見た。「冗談に隠された切実な思いを嗅ぎ取って、

「心配しないで。僕の家はここなんだから」

それどころか、思わぬお土産まで持ってくるかもしれないよ、と伊織は心の中で付け加えた。

「この子つたら」

由紀子は、愛しくてたまらないというふうには、伊織の頭をくしゃくしゃとなでた。決まり悪さに伊織はあわてて身を引く。

「ところで、補習って何の補習？」

由紀子が思い出したように訊いた。しまった、と伊織は額を押さえたが、あとの祭りというものだ。

「実は、化学の試験で……」

四十八点を取ったことをしびしび白状すると、由紀子の目は一転して三角になった。

「まあまあ、取っちゃったもんはしょうがない。次に挽回すればいいじゃないか」

繁がとりなしたが、

「あなたがそうやって甘やかすから……」

由紀子に矛先ほこみさきを向けられて早々に退散してしまい、結局伊織は、小一時間ほどもお説教を食うはめになったのである。

第三章 南伊豆の豪邸（一）

夏真つ盛りのある日、伊織は鈴倉邸へ旅立った。東京から伊東までは東海道本線の準急で二時間半ほど、その先は東海バスで二、三時間なので、下田までは半日もあれば着くのだが、関東を出たことのない伊織には十分長旅に感じられた。まして、腹に一物ある佐々木と二人きりなのだ。車窓の風景さえ満足に楽しめない。

鈴倉邸は、下田港の東北東、Sという海岸沿いにあった。竹垣に囲まれた、風雅な二階建ての日本家屋である。実業家の邸宅といって漠然と想像される、俗っぽさや趣味の悪さはみじんも感じられず、むしろ金をかけていることを誇示しない奥ゆかしさがある。伊織は思わず感嘆してしまった。

瓦葺きの門をくぐると、松や杉や楓の木、笹、美しく刈り込まれた灌木、飛び石などが出迎える。伊織が見たのは表だけだが、裏にはさらに広大な庭園が広がっているようだ。

「このお屋敷は、総一郎様のご尊父で、鈴倉海産の創業者でいらっしやる鈴倉左門様が、大正の中頃お建てになったものなのですよ」
佐々木が誇らしげに解説する。

「只今戻りました」
佐々木が母屋の玄関の戸を引くと、ふくよかな中年の女性が現れ、着物の裾を押さえて、上がりかまちに膝を突いた。

「伊織様でいらっしやいますね。ようこそお出でくださいました。わたくし家政婦の多喜たきと申します」

多喜は三つ指そろえて深々と頭を下げた。

「いえ、こちらこそ……」

慣れない待遇に伊織が恐縮していると、多喜は丸顔をほころばせて、

「さあ、どうぞこちらへ」

伊織を二階へ案内した。佐々木も伊織のリュックサックを抱えて

ついてくる。

伊織にあてがわれたのは八畳の和室で、もともと客を泊めるための部屋なのだろう、生活臭がなく旅館の一室のような感じがした。座卓、座布団、衣桁いこうがあり、床の間には何と書いてあるのかわからない掛け軸と、清楚な風情の生け花が飾られている。

「少々お待ちくださいませ。総一郎様と数馬様にお知らせしてまいります」

佐々木はいったん姿を消したが、五分ほどで戻ってきて、

「すぐにでもお会いになりたいとのことです。荷ほどきがお済みになりましたら、応接間にお通いたします」

(いよいよだ)

伊織は生唾を飲み込んだ。本当は荷ほどきするほどの荷物もないが、心の準備をするために、貴重品を確認したり衣類を出したりする。

「そろそろよろしいでしょうか？」

頃合を見計らって、佐々木が様子を見に来た。そのあとについて、伊織は階段を下りる。期待や緊張や不安が胸に押し寄せ、人の顔のようなイメージがもやもやと脳裏に浮かんだ。

「失礼いたします」

応接間の前で、佐々木が声をかけると、

「ああ。入りたまえ」

しわがれた低い男の声が応じた。佐々木はふすまを開けると、一歩退いて、伊織に先に入るよう手ぶりで示す。

部屋に足を踏み入ると、四角い座卓の三辺を、三人の人物が囲んでいた。口ひげとあごひげをたくわえたいかめしい老翁、垂れぎみの目に二重あごの、小柄で上品な老婦人、彼女と面差しの似通った、気弱そうだが温厚そうな中年の男という顔ぶれだ。

「最奥にいらつしやるのが総一郎様、伊織様から見て左側にいらつしやるのが数馬様、右側にいらつしやるのが絹枝様でございます」

佐々木が紹介したが、それを待つまでもなく、誰が誰だかは一目

瞭然だった。

「伊織……！」

数馬が感に堪えかねたように腰を浮かせた。伊織は言葉を探して立ちすくむ。

「こちら、落ち着け。伊織が困っているじゃないか」

総一郎が苦笑して、手を上下させつつ数馬をいさめた。数馬は我を忘れた自分を恥じるように目を伏せて、座り直す。

「おまえも座りなさい」

伊織も総一郎の勧めに従い、そつと膝を折った。

「では、わたくしはしばし」

佐々木が総一郎に目くばせして、席を外す。

「こんな辺鄙な土地までよく来てくれた、伊織」

真つ先に口を開いたのは総一郎だった。

「いえ、そんな……」

「佐々木から話を聞いたときは、さぞかし驚いただろう」

「……はい」

「今更本当の祖父母だ父だといったところで、素直に歓迎してもらえるととは思っていない。だが、ここにいる間に少しでもわだかまりを溶かして、打ちとけてはくれないだろうか？ おまえとおまえのお母さんには、いささか心ない仕打ちをしてしまった。家のため、会社のためにひた走ってきた私だ、当時は気にも留めなかったが、年のせいも、近頃昔を振り返って物思いに沈むことが多くてな。せめてもの罪滅ぼしだと思つて、おまえには精いっぱいのもてなしをするつもりだ」

総一郎の言葉は、一見感慨といたわりに満ちており、心にもない嘘だとは信じがたい。伊織は拍子抜けして祖父を見つめていた。

「謝らなければならぬのは私のほうだ、伊織」

数馬がうなだれて口を開いた。

「秋子がおまえを連れて出奔し、生死もわからなくなったとき、私はどんなに自分を責めたことだろう。だから、十五年も経つておま

えの居場所がわかり、あれほど秋子と私との結婚に反対していた父が、おまえに会いたいと言いだしたとき、私は驚きと喜びでいっぱいだった。唯一悔やんでも悔やみきれないのは、秋子がもうこの世の人でなかったということだが……」

数馬は目元を指でぬぐって、

「許してくれなんて言える立場じゃないが、せめて、私がずっとおまえのことを気にかけていたということだけは信じてほしい」

真摯な眼差しと声で訴えられて、

「はい。僕もあなたを恨んでなんかいません。ただ、突然のことでびっくりしてしまつて……」

伊織は気まずいようなくすぐつたいような気持ちで答える。数馬は優しさと淋しさの入りまじった瞳をして、

「ありがとう。おまえはいい子に育つたね。育てのご両親……繁さんと由紀子さんだったね、お二人に感謝しなくては」

それから、伊織は三人　主に総一郎から、学校はどうか、得意な教科は何か、女友達はいるのか、といった他愛ない質問を受けただけであった。長年会社を切り盛りしてきた経験がものを言つてか、総一郎は話し上手かつ聞き上手だ。緊張と警戒からいつにもまして口が重くなつている伊織とも、会話を途切れさせなかつた。

「皆様、ご夕食の用意が整いました」

やがて多喜が呼びに来て、伊織たちは座敷へ向かつた。

十五畳ばかりの座敷には、ずらりと漆塗りの箱膳が並んでいる。すでに席に着いていた七人の人々が、いつせいに伊織に目を向けた。さすがに無遠慮に見つめる者はいなかつたが、その分感情が凝縮されていよう、伊織をたじろがせるには十分だった。

総一郎は伊織の肩に手を置くと、

「この子が伊織だ。前もつて話しておいたとおり、今日から一週間ほどこの家に滞在する。温かく迎えてあげるように」

「よろしく願います」

伊織が頭を下げると、一瞬間があつたものの、全員が会釈を返し

た。

「奥から順に、私の次男、つまりおまえの叔父に当たる兵馬へいば、数馬の息子の八雲、数馬の妻の志摩子、兵馬の妻の昌子あきこ、兵馬の長女と次女の、真弓と亜弓だ。亜弓はまだ小学五年だから、遊び相手には物足りんだろうが、八雲と真弓は中学二年だ。年も近いし、気兼ねせず接してほしい」

総一郎が、身ぶりとともに小声で説明する。

兵馬は絹枝より総一郎似だが、総一郎にはない（あるいは年の功で隠しているのかもしれない）冷たさや狡猾さがうかがえる。八雲と志摩子はともに端整な顔立ちをしているが、受ける印象は正対だ。八雲が人なつこそうで、瞳に抑えきれぬ無邪気な好奇心をのぞかせているのに対し、志摩子は神経質そうで、目を凝らし唇を引き結んでいる。昌子は小太りで、一見ご近所の気のいいおばさんという感じ、真弓は色白でおとなしげな、亜弓は頬の赤いおてんばそうな少女だ。

「手前の彼は書生の安達だ。父親は鈴倉海産の重役で、私の腹心の部下だったが、惜しいことに数年前他界してしまつてな。以来、引き取つて学費の面倒を見ている」

色黒でいかついが朴訥そうな青年が、ぺこりと頭を下げた。

主賓ということで、伊織は総一郎にもっとも近い席をあてがわれた。正面には数馬、隣には絹枝が座る。目の前の膳には、まぐろ、たい、甘えび、いか、そのほか伊織が名を知らぬ白身の魚の刺身、あじのたたき、えびやさつまいも、なすや大葉の天ぷら、たこと海草の酢の物、かにお吸い物などが、所狭しと並べられていた。

「では、我が孫伊織との再会を祝つて」

総一郎がさかずきを掲げ、宴が始まつた。だが、場が盛り上がるはずもない。数馬の態度はぎこちなく、絹枝は無口だ。志摩子は一度も笑わないし、子供たちもはしゃがず、せつかくのごちそうにも食指が動かないようだ。多弁だったのは主たる総一郎と、

「いやあ、あの秋子さんの忘れ形見が見つかるとはなあ。めでたい、

めでたい」

などと放言して、早くから冷酒で顔を赤くしていた兵馬くらのものであった。

気づまりな宴が終わると、伊織は勧められるままに風呂を使った。優に五人は浸かれそうな、旅館顔負けの檜風呂で、多喜曰く温泉を引いてあるのだという。自分の置かれている立場のせいもあるが、広すぎるのと、照明が暗いのが妙に不安をあおる。浴槽のへりをつかみ、水に浮いて足をばたばたさせてみたが、不意に空しくなつてやめた。

風呂を上がり、漠然とした焦慮と緊張から、手早く体を拭いて着替える。が、脱衣所を出たとたん、伊織はぎよつとして立ちすくんだ。兵馬が待ちかまえていたように渡り廊下に立っていたからだ。

「ええと……次入りますか？」

伊織がいささか間の抜けた質問をすると、兵馬はそれをまったく無視して、

「さつきは父や兄の手前、歓迎するふりをしていたがな。一つ忠告しておく」

憎々しげに伊織を睨みつけた。黒揚羽から兵馬の人柄について聞いてはいたから、「忠告」の内容については想像がついたが、

「……何のことでしょうか？」

空とぼけてみせる。兵馬は鼻で嗤って、

「純真ぶつてもむださ。遺産だよ、遺産」

「遺産？」

「ああ。おまえとしては、父親や祖父、あるいは我らが一族をよく思つてはいるまい。たかが女工風情と、鈴倉家の跡継ぎが結婚などできるはずがない……秋子が捨てられたのは当然のことだったとしてもな。近親の名乗りを上げられたときだって、反発する気持ちのほうが強かつたんじゃないのか？ それをほいほいと招待に応じたのは、祖父に取り入つて、あわよくば鈴倉家の財産を、という魂胆なんだろう？ もしかしたら、おまえの育ての親どもが焚きつけた

のかもしれないが」

兵馬はねちねちした口調で決めつける。伊織は、憤るよりもむしろ呆れ果てたような気持ちで、

「僕はそんなこと考えていません。僕の両親だって一緒です」
きっぱりと言いつ返した。

「ふん、どうだか」

兵馬はまったく信じていない顔で、

「とにかく、妙な気を起こすんじゃないぞ。父はおまえごときに懐柔されるほど愚かじゃないし、肝心の鏡がこの場にないのでは、そいつの真贋を見極めることもできない。おまえが兄の息子だという確たる証拠は、何もないんだ。あの昼行灯ひるあんどんの兄が、長男というだけで社長の座に就いているだけでも腹立たしいのに、これ以上理不尽な目を見てたまるものか」

伊織が黙り込んだのを見て、兵馬は小気味よさそうに唇をゆがめると、きびすを返して去っていった。

兵馬の姿が見えなくなると、伊織は小さくため息をついた。と、

「どうかなさいましたの？」

いつの間にか、背後に子猫を思わせる俊敏そうな少女が、小首をかしげて立っていた。年のころは十三、四歳か。質素な身なりからして女中であろう。肩にかかるくらいの縮れた髪にとび色の目が、ちよつとエキゾチックな印象を与える。

「いや……何でもないんだ」

言葉を濁して歩き出そうとすると、少女は不意に伊織の耳に口を寄せて、

「今夜十二時、あなたの部屋で」
ささやいた。

「え……？　ちょ、ちよつと」

伊織は赤くなつて、どういふことか問いただそうとしたが、少女は早足で遠ざかっていく。狐につままれたようにその後ろ姿を見つめているうちに、伊織は思い出した。黒揚羽の、「屋敷には私の手

下が潜入している」という言葉を。

逸る気持ちを抑えつつ部屋に戻ると、伊織は本を読みつつ十二時を待った。「伊豆じゃないけど、雰囲気は似てるかもしれない」と言つて明生が貸してくれた、三島由紀夫の『潮騒』。昨年映画化もされた、いかにも明生が好みそうな、素朴な青春恋愛小説だ。探偵小説を持つてこなかったのは、少しでも黒揚羽を想起させるようなものは、鈴倉一族の目に触れさせないほうが無難だ、と思つたからである。

伊織が鈴倉海産の社長令息だということが、どこからともなくもれると、妙に愛想のよくなつた者、羨望の眼差しで遠巻きに見つめる者、宮島や井上のように無視を決め込む者もいたが、明生は以前と何ら変わることもなく接してくれる。そんなことを思うと、今朝出發したばかりだというのに、もう東京が恋しくなつてきた。

だが、それもつかの間、一日の疲れが一気に押し寄せてきて、まぶたが重くなる。

(少しだけ……)

伊織は誘惑に負け、畳に横になつて寝入ってしまった。

「ねえ、ねえつたら」

肩を揺すぶられて、伊織はまぶたを押し上げた。目の前というより目の上に、先程の少女の顔がある。動転して飛び起きようとした結果、少女と思いきり額をぶつけてしまった。

「いたた……」

二人はそろつて額を押さえ、呻いた。

「何するのよ！ 危ないじゃないの」

さすがに声は抑えていたが、少女はぶりぶりとは非難する。

「ごめん。でも、まさか無断で部屋に入つてくるとは思わなかったんだ」

伊織が弁解すると、少女はますます頬をふくらませた。

「それって皮肉？ 言つとくけど、あたし何度も声かけたのよ。眠りこけてて気づかないあなたがいけないんじゃないの」

そう反論されると、伊織にはぐうの音も出なかった。

「お姉さまのファンで、宝探しに協力してくれるっていうから、どんな人かとわくわくして待ってたのに……期待外れだったわ」

少女が肩をすくめて独りごちる。

「そこまで言うことないじゃないか」

さしもの伊織も言い返したが、少女は知らん顔であさつての方向を向いている。

「わかったよ。悪かったってば」

面倒になって折れると、少女はちらつと横目に視線をよこして、

「いいわ。許したげる」

歯切れよく言い、もったいぶるようにゆっくりこちらに向き直った。

「あたし、黒揚羽お姉さまの手下の千里^{ちとせ}。ここでは偽名を使ってるから、まりって呼ばれてるけど」

「よろしく、千里。僕は……」

「知ってるわ。中野伊織でしょ」

先回りして言うと、千里はにっと白い八重歯を見せた。それこそ猫の目のように、くるくると気分の変わる子らしい。お天気屋というやつだ。

「そうだよ。で、用件は？」

相手のペースに巻き込まれるまいと、伊織が冷静に応じると、千里はいささか物足りなそうだったが、

「お姉さまから言つて。総一郎の誕生会の日のことよ」

ようやく本題に入ってくれた。伊織は一瞬首をかしげたのち、五日の祝賀会のことを指しているのだと思いついた。「祝賀会」や「古希のお祝い」と、「誕生会」ではずいぶんニュアンスが違うが、間違っではないのでとりあえずうなずいておく。

「お姉さまはね、それを利用して暗号文を盗むつもりなんですって」「あれ……」

まだ盗んでなかったの、と言いかけて、伊織は口をつぐんだ。い

やみなどではなく、単に事実を述べようとしたただけだが、千里がまた機嫌を損ねそうだったからだ。

「今、ある代議士の娘さんが神経衰弱で、このあたりで療養してるんだけど、その子の名をかたって鈴倉家に接近してるのよ。祝賀会の招待状ももらったって」

「順調なんだね。いつもどおり予告状は出すの？」

「もちろんよ。それがお姉さまの信条だもの」

「でも、そのために祝賀会を中止したりしないだろうか？」

千里は得意げに鼻を鳴らして、

「大丈夫よ。総一郎は鏡に注目が集まるのをいやがっているし、泥棒ごときにびくびくするなんてお家の恥、むしろ黒揚羽を捕らえるチャンスだ、とも思ってるだろうって」

「そうか。ねえ、僕にできることは何かない？」

「ええとね……」

千里は目を宙に泳がせた。本気で考え込んでいるのではない証拠に、口元がゆるんでいる。

「不測の事態が起こっても落ち着いていること。伊織はちょっとそこつ者だから気をつけろ、ですって。さっきあたしにぶつかつたことからして、よくわかるわ」

伊織は肩を落とした。

(そこつ者……)

これでは、力を貸しているのか足手まといになっているのかわからない。

「何よ。これくらいで落ち込むなんて、情けないわ。お姉さまにもあたしにも、怪盗の……あたしなんかはただの手下だけど、誇りがあるの。盗む仕事までは、自分たちの手でやりたいのよ。あなたはその先、宝を探す仕事を手伝えればいいじゃないの」

つつけんどんな口調ながら、慰めてくれるつもりらしい。

「ありがとう」

伊織が微笑むと、千里は顔を赤らめて、むっとしたような困った

ような顔で目を逸らした。

「じゃあ、今日のところはこれで帰るわ。何かあったらまた連絡するから」

「うん。気をつけて」

邸内を移動するのに「気をつけて」もないものだが、この場合はまんざらおかしくもなかつた。

千里が廊下の奥の闇へと消えていくと、伊織は電灯を消して布団にもぐり込んだ。千里の話はんすうを反芻はんすうしているうちに、再び眠りに落ちていったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236x/>

怪盗黒揚羽

2011年11月5日19時06分発行